

書評

尾関周二著『21世紀の変革思想へ向けて——環境・農・デジタルの視点から——』本の泉社、2021年

亀山 純生

1. 本書の画期的意義と「共生社会システム」研究

著者は、ハーバマスのコミュニケーション論を介してマルクス思想を現代化してきた哲学者として、そして現代社会批判と結合せる環境哲学の開拓者として知られる。また、本学会の創設に中心的に関わり「共生社会システム」の研究に対して、理論的思想的な問題を解明し農の復権を哲学的に基礎づけて、重要な役割を果たしてきた。特に2015年にはその成果を『多元的共生社会が未来を開く』（農林統計出版）として公刊し、共生社会運動の基本性格と農ベースの将来社会を「多元的共生社会」と理論的に整理し、閉塞する現代社会の人類史的転換を提起した。この本（以下、前著）は、本学会10周年記念事業の2巻本の『共生社会』（農林統計出版2016）作成過程でも執筆者共通の参照点とされ、その後の本学会の研究のプラットフォーム形成に大きく寄与した。

本書はこれを受けつつ、特にその後顕在化した二つの事への理論的注目をテコに、新たに「20世紀型から脱皮した21世紀型の変革の社会理論の構築」のための根本フレームを提示する。

一つは、認知革命を軸に斬新な人類史を示しデジタル革命による近未来を描いたハリリの作品が全世界でベストセラーとなったことである（『サピエンス全史』が1500万部以上など）。著者はこの事の中に、20世紀型変革理論の没落後なお見えない新しい変革思想への潜在的期待を見る。そして認知革命の人類史的な位置づけを評価する一方で、未来社会をAIによる人間の二極化（「ホモ・デウス」と「無用階級」）と描くハリリや、デジタル革命により人類史上第5の新時代を夢想する政府財界の「Society5.0」の脱資本主義論の欠如を批判する。

もう一つは、2018年のマルクス生誕200年を機に集約された最新のマルクス研究（著者も一翼を担う）が、20世紀マルクス主義が無視した小農・共同体の積極的評価がマルクス最後の思想的到達だと明らかにしたことである。

これを踏まえて本書は、前著で示した「人間と自然の物質代謝」に注目する人類史の視点や将来社会＝「農工共生社会」などを発展させた人類史の新フレームを、21世紀型変革の社会理論の基礎として提示する。すなわち、人類史的な認知革命を実に多様な論者を援用しつつ独自に言語論的・情報論的・技術論的・社会論的に豊かにし、それを最新のマルクス思想と結合して、「国民共同体」やデジタル革命を位置づける画期的な人類史的「物質代謝史観」がそれである。そしてこれにより、新たに「労農アソシエーション」を21世紀の変革主体と明確化し、将来の「持続可能な共生型社会」像を「農工デジタル社会」へとバージョンアップする。

この意味で本書は、「共生社会システム研究」のプラットフォームの幅をさらに広げ深化する点で、創立15周年を迎える本学会にとって大きな意義を持つ。同時に史的唯物論を全面的に再構築して20世紀型変革理論の代表のマルクス主義の限界を突破し、マルクス思想を21世紀型変革理論の基礎として蘇らせる画期的意義をもつ。何より現代社会の限界が全面露呈し、地球史的環境危機やAIの人類凌駕論で人々が人類史的な不安に陥っているのに変革の展望を示し得ない社会理論学界・思想界への根本的な問題提起である。それはまた著者が強調するように、目下のコロナ禍の人類史的打開の基本的論点の提起でもある。

2. 三部8章から成る本書の主な内容

「第I部 環境思想と社会理論の交差」では2章が配され、環境哲学から「物質代謝史観」への接続が示される。

「第1章 環境思想の社会理論への通路」では、「環境正義」を軸に環境思想とその「通路」を概観し、環境思想が示す自然の基礎性から「人間的価値」の根幹に「生命的価値」を位置づ

ける。「第2章 環境・社会の危機と『物質代謝』概念の射程」では、環境思想での自然中心主義と人間中心主義の対立はマルクスの「人間主義と自然主義の統一」理念が克服すること、不可分の環境危機と社会危機の根源は資本主義による「人間と自然の物質代謝の亀裂・攪乱」にあることを示し、そこからマルクスの物質代謝概念を深化させる。

「第Ⅱ部 歴史観の深化と新たな変革視点」では3章が配され、20世紀マルクス主義を超える新しい史的唯物論として「物質代謝史観」が提示される。

「第3章 物質代謝様式とホメオスタシス——歴史観の深化(1)」では20世紀型生産力史観を超えそれを埋め込む新史観の要として、「生産過程」と「生活過程」を統合する「物質代謝様式」概念を提示する。そしてその基底に「ホメオスタシス」概念を措き、これが新たな社会的主体概念を拓くことを示す。これを受けて「第4章 共同体と民族・ネーション——歴史観の深化(2)」では最新のマルクス研究に依拠して、20世紀型階級社会論を超えて「共同体」を位置づける。特に認知革命の言語論的意義に注目し、最新の民族論やアンダーソンの「想像の共同体」論を媒介として「ネーション」や「国民共同体」の意義を示す。さらに「第5章 『労農アソシエーション』と社会変革の力」では、最新のマルクス小農論と共に国連「小農の権利宣言」(2018)を射程に、マルクス主義の農民蔑視の労農同盟論を超えた対等・相互尊敬的な「労農アソシエーション」(半農半Xが媒介)を21世紀型社会変革の主体と位置づける。

「第Ⅲ部 人類史の中の労働・技術・情報と現代社会での展開」では2章が配され、「物質代謝史観」の内にデジタル革命が位置づけられる。

「第6章 人類史の中の労働・技術・情報」では、人間と自然の物質代謝の人類史的過程を媒介するのが労働であることを確認し、ロック由来の資本主義的な労働＝私的所有論を批判しマルクス主義所有論を超えて、労働が「共同所有」と「個人所有」(≠私的所有)を担保することを示す。さらに、農業労働の工業労働との違いを認知革命の情報論的意義の視点から、20世紀的な〈技術＝道具〉論を超えた三木清の人類史的な〈技術＝主体・環境の適応行為の型〉論を紹介して位置づけ、そこからデジタル革命を位置づける。

これを受け「第7章 デジタル革命と現代社会の分岐」では、言語哲学・脳科学・心理学からディープラーニング等を分析してAIの本質を「記号操作機械」と規定し、AI・脳・心の一面の共通性と共に人間固有の言語的記号活動(意味創造)との相異を明示する。その上でAIやデジタル革命が生む「人工生態系」を人間活動のサポートと位置づけ、労働・教育・福祉におけるAIの意義や「スマート農業」の可能性を丁寧に示す。同時にAIによる物象化・人間支配の危険性を指摘し、その根源の資本主義の克服による「工業社会から農工デジタル社会へ」の転換を展望する。

以上を受けて「終章 脱資本主義化と将来社会へ向けて」では、前著で提示した将来社会への転換プロセスが補強的に示される。農の復権を軸とする「資本主義システムからの漸次的脱出／統制へ向けて」のプログラム、パンデミック・核戦争・環境危機の克服、食の安全と南北格差解決等の課題にとっての国際連帯的国民国家の役割とグローバルなガバナンス、そこにおける「対抗的公共圏」の意義等として。

3. 20世紀型思想を超える本書の理論ポイント

以上の概括だけでも、21世紀型の社会変革理論を基礎づける本書の画期的意義と骨太さ・斬新さの一端は窺えよう。その上で、評者の関心から特に注目される20世紀型＝近代思想を超える理論ポイントに若干ふれたい。

第一は、歴史と社会の主体である人間を、ホメオスタシス概念を核に〈生命主体としての身体〉と明確化したことである。

これにより、人間活動の本質は身体の生命的生活活動、つまり、他の自然との物質代謝の中の生命個体としての平衡状態の持続にあることを鮮明にした。そして、人間固有の文化・技術はこの身体＝生命主体のホメオスタシスに根拠を持ち、それ故人間活動は言語獲得の認知革命

により社会化された文化的な生命活動として、自然への適応活動であることを明らかにした。

これは、人間の本質を自然から独立の精神（文化）としたデカルト以来の身心二元論の近代図式はもとより、生命無視の近代的経済成長主義や、人間を身体としながら専ら自然支配を文明と見る 20 世紀マルクス主義の生産力史観を根本的に転換する。他方で、身心不可分と称して身体を精神の容器・自己の所有物と見なし、あるいは逆に人間を脳に還元し、人間＝生命と称して人間を生物分子・遺伝情報に解体する現代の人間観をも克服する。その要が生命活動の主体を社会的文化的身体（評者的には生身の人間）とすることである。これによって本書は、人間的価値・社会的価値・文化的価値の根幹は生命的価値にあり、人間物象化の克服は生身の社会的文化的生命活動たる農によることを鮮明にしている。

さらに敢えて強調すれば、社会的文化的身体を生命主体とすることで、現代人が厚い人工生態・文明カプセルに包まれる中で忘却してきた〈己は死すべき有限な生命個体〉という「宿命」を鮮やかに浮上させる。これは人間能力無限発展の近代的観念の延長に、デジタル革命により〈何でも意のままにできる〉万能の人間（ハラルの言う「ホモ・デウス」）を理想とする現代人の人生観を、有限な生身の生の「宿命」故にこそこの〈意味ある生〉へと転換する起点ともなる。

第二は、これを前提に社会の原理を、諸個人の生命活動を支える社会的物質代謝様式の歴史的变化過程におけるホメオスタシスに措くことによって、それを体現する「共同体」を歴史貫通的社会関係と位置づけたことである。

本書は、最新のマルクス研究に拠りマルクスの *Gemeinde* と *Gemeinwesen* の区別に注目し、前者を①二次的「共同統治体」とし、後者をその基礎の②一次的「共同生活体」とする。さらに前者の歴史的展開の中に国家を位置づけ、双方の媒介として「ネーション」（エスニシティー→国民）を③「シンボル共同態」と位置づける。これによって、国家・民族を専ら抑圧装置と見なす 20 世紀マルクス主義の暴力史観・階級史観を超え、①②③の三契機構造の斬新な「共同体」史観を提示する。これは、生産関係に加え交換関係を物質代謝過程の契機とした前著の論点を包括しつつ、新たに社会総体のホメオスタシスを原理とするからこそ、有機体的社会構成体（広義の「共同体」）の中でこれらの役割を位置づけえたことを意味する。

その場合歴史的過程においては、特に農業革命以後は、階級が発生し国家が登場して社会構成体の内で生産過程における階級関係が重要な位置を占める。それによって大きな国家は②の基礎的「共同生活体」と矛盾して①の「統治共同体」の性格を希薄化・喪失し、民衆・生活者の支配・抑圧機構の性格を強めた。そして、双方を媒介する③の「シンボル共同態」も、特に「エスニシティー」を離れて国家と結びつく場合は、「幻想共同体」となった（西洋中世国家を支えたキリスト教の「宗教共同体」のように）。その意味で、③の「シンボル共同態」が積極的な意味で実在的な「想像の共同体」として現れ、国家が①の「統治共同体」の性格を回復するのは近代においてである。

ここから本書は近代国家を、単に排他的抑圧的な「民族国家」（＝幻想共同体）となった面だけを見るのではなく、「自由・平等・博愛」を「シンボル」とする実在の「想像の共同体」（≠幻想共同体）たる「国民国家」となった面を積極的に位置づける。その延長上に 21 世紀の社会変革過程で重要な役割を果たす国際連帯的「国民国家」が位置づけられ、グローバルなガバナンス組織も国際的「想像の共同体」となると思われる。そして、その根底が農ベースの「共同生活体」であり、立体的な広義の「共同体」の媒介的担い手が「労農アソシエーション」となる。それは、グローバル資本主義からの転換過程においては、半農半 X のライフスタイルを媒介にした階級主体と国民主体の統一となるようにも窺える。

4. 立体的ホメオスタシス原理の射程

以上見たように、本書の提起する画期的「物質代謝史観」と斬新な論点は、理論的核心に独自のホメオスタシス原理（生命身体及び社会の）を設定したからこそ展開されたように、評者には思われる。

この原理設定によって本書は、定常社会論やレジリエンス社会論の問題圏をも社会的ホメオスタシスに包括すると共に、それらの議論の弱点を明確にする。その焦点が生命身体のホメオスタシスであり、それは物質代謝を根底とする自然の生命世界とのコミュニケーションの中でこそ実現することの明示である。これにより文化・技術・社会の〈進化〉を、歴史的変容として複雑化・深化であっても限界なき単線的発展ではなく、自然の生命世界のホメオスタシスの中で他の生命体との共進化として位置づけ、20世紀型の〈唯人間論〉的進歩史観を根本的に克服する。その意味で「物質代謝史観」は、自然（生態系）のホメオスタシス、生命的身体のホメオスタシスを内的契機とする立体的な社会的ホメオスタシスを原理とすることで、共生持続型社会の概念に新たな視点を照射していると思われる。そして、その体現が物質代謝を基礎とする有機体的「共同体」とされることで、歴史解釈や、何より、既述のように21世紀の社会変革理論に決定的に重要な方向を提起している。

歴史解釈で言うたとえば評者のように、中世が〈災害社会〉である故に国家仏教（正統派浄土教）を単に抑圧イデオロギーでなく災害苦の民衆が同意し求める救済思想でもあるとの見方を「シンボル」＝社会（生活者）の共同思想として基礎づけ、中世史への新たな視点を拓く。災害の社会的危機の中で国家（特に武士連合政権の鎌倉幕府）はこの「シンボル」を介して、荘園（対立内包の「共同生活体」）の変容との緊張関係の中で、単に抑圧機能だけでなく、生命的生活保障機能（災害救済・復興・開拓）とセットで中世社会の〈安定〉の要となった意義（「統治共同体」の側面）を解明する画期的方向を照射する。

かかる画期的な歴史観であるが故の一つ惜しまれるのは、社会全体を広義の「共同体」とする場合、一次的な農の「共同生活体」における生身の人間が生自然と関わる故の「共同」と、「シンボル」を介する二次的な「共同」との質的違いと相互関係がやや不鮮明なことである。この明確化は、広義「共同体」の三契機の有機体的構造とその〈強度〉、変革主体の質の解明にとって重要と思うからである。本書の主題が新史観の骨格提示にある故に略されたかと思われるが、続刊に期待したい。

最後にもう一点、「物質代謝史観」からマルクスの歴史「地層」論に注目することによって、ユングに拠りつつ人間の精神の深部を「人類社会深層の集合的無意識」から解釈する視角も画期的である。これは前著でも弱者との共生思想が人類史過程で人間は狩られる弱者だったことに源があるなどと指摘されていた。これを受けて本書では特に、「平等思想」が歴史過程で再三登場するのは狩猟採集時代の物質代謝様式と平等意識に源があり、それらが深層の人類集合意識をなしているからだと強調される。精神のこの人類史的「深層」は「物質代謝史観」の原理たる社会的ホメオスタシス概念の不可欠の、しかも決定的契機とも思われる。経済・政治と共に社会の構成要素たる思想の深部にあって、社会が傾き危機に陥った時に平衡状態回復へと導く思想の窮極的源泉に位置するように思うからである。そしてそれは、専ら古いものの否定による精神の発展を言う近現代哲学への根底的問題提起でもある。惜しむらくはこれも本書の主題故に略述に止まるが、著者と夫人の共著『こころの病は人生模様——統合失調症・ユング・人類精神史』（本の泉社、2021年）で詳論されているので、是非参照されたい。

デジタル革命論など注目すべき点はなお多いが、与えられた紙幅を大きく超えてしまった。敢えて繰り返すが、没落の20世紀型変革論を全面的に超える21世紀型変革の根本フレームの画期的提起である。本学会内外で、この提起の多元共生的な協同的深化を願うことである。

(210427 成稿、210715 初校)